Journal of History for the Public (2010) **7**, pp. 44-63 ©2010 Department of Occidental History, Osaka University. ISSN 1348-852x
Spock Babies: The Discourse on Generation and Child in a Childrearing Manual in the Postwar Era
Takahito Moriyama

特集　世代と歴史学のいま

スポックの子どもたち

1940 年代から 60 年代における育児書の子ども像と世代言説

森山貴仁

はじめに

1960 年代後半の米国において若者を中心とする社会運動が台頭したとき、多くの大人はこれに困惑した。彼らの常識では若者は、特に、恵まれた家庭環境で育ち、高等教育を受ける大学生は、社会への関心が低い「沈黙の世代」だったからである。1930 年生まれのケネス・ケニストンは、自分が学生だった 50 年代前半には大学に「『運動』というものはなかった」と隔世の感を抱いた。50 年代の学生は一般に「不関与（the “uncommitted”）」であり、ケニストンは「米国の学生が政治的な役割を演じる可能性はほとんどない」と考え、その数年後に大学生が積極的に異議申し立てを起こすとは「まったく予想していなかった」[(1)]。この時期ほど、新たな「世代」が強く認識されたことはなかっただろう。

「世代」は歴史や社会で頻繁に語られるが、これまでその概念自体に関する学術研究は歴史学や社会学では少なかった。それでも先行の世代論の特徴として 2 つをあげられる。1 つは異なる年齢集団の比較分析を通して、人々の行動や意識とそれらの変化の相違を分析する点である。こうした分析で注目されるのは各集団の特徴であり、したがって「世代」の差異、変化、非連続性が追及される[(2)]。

もう 1 つは青年神話と呼ぶべきものであり、ある「世代」の特徴が青年期に形成されるという前提に立つ研究である。仮にそうした研究を世代＝若者論と呼ぼう。世代＝若者論は、社会

(1) ケニストンの著作はこの変化と驚きをよく物語る。Kenneth Keniston, *The Uncommitted: Alienated Youth in American Society* (New York: Harcourt, Brace & World, 1965); *Young Radicals: Notes on Committed Youth* (New York: Harcourt, Brace & World, 1968), 294, 297; *Youth and Dissent: The Rise of a New Opposition* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1971), vii, xi.

(2) たとえば、Stephen C. Craig and Stephen Earl Bennett, eds., *After the Boom: The Politics of Generation X* (Lanham, MD.: Rowman & Littlefield, 1997).

運動の参加者を対象とし、その不満や、運動の特質、社会的影響を論じてきた。[3] しかしこの種の研究には問題がある。たとえば 1960 年代は新左翼運動の時代というイメージが強く、いわゆる「60 年代世代」もニューレフトを指し、保守派の若者はこれに含まれない。また、大学生が主な参加者だったことから、60 年代の運動と世代は中産階級と同一視される傾向がある。さらに、当時の典型的な若者は暗黙のうちに大学生の男子とされ、女性の存在は参加の現状と比べ言説上では弱かった。このように世代＝若者概念から排除される者たちは多く、同じ年齢集団の中に政治、階級、ジェンダーなど多数の分断線が引かれるのである。[4]

本稿は『スポック博士の育児書（*Baby and Child Care*）』（以下『育児書』）の考察を通して、社会化の過程と世代言説を検討し、先行研究とは異なる世代＝子ども論のアプローチをとる。60 年代の学生は 1946 年から 64 年に出生した「ベビーブーム」世代の初期に属するが、第二次世界大戦前後において米国では育児と社会化が大きく変化したといわれる。1946 年出版の『育児書』を代表として、厳格な育児から寛容なものへと移り変わり、親の権威よりもマスメディアや仲間集団など新たな要素が社会化では重要になったとされる。『育児書』は当時の米国社会の状況に適合して大ベストセラーとなり、その普及からスポック博士の助言で育てられた人々は「スポックの子どもたち（Spock babies）」と呼ばれた。

世代「言説」の検討というのは、本稿の主眼が、ある世代の特徴や実態の検証ではなく、特定の年齢層がどのように外から捉えられたのか考察することに置かれるからである。世代は言説の構築物であり、先行研究のように各「世代」に差異があることを当然視するのではなく、その「世代差」を際立たせる社会的前提を検証したい。そのために本研究は次の 2 点を論じていく。1 つは、当時の社会化の変化が、家庭の役割が外から浸食された結果ではなく、社会や職業の変動に家庭が適応する試みだった点である。第二次大戦後の米国ではテレビが急速に普及し、他方でクラブや学校など同年齢の児童を組織する制度の発達により、子どもの成長への親の影響力が相対的に弱まったとされるが、『育児書』は異なる要因を垣間見せる。もう 1 つは、若者という概念が 50・60 年代に細分化したことである。多数のベビーブーマーが生まれ、若い人々への注目がこの時期に高まっていた。そして子どもから大人へと成長する過程の中で、子どもと大人との境界が細かく曖昧になっていったのである。

---

(3) ニューレフト運動やカウンターカルチャーの研究は、梅崎透「「すわり込み」から『ポートヒューロン宣言』へ――ニューレフト運動の形成に関する一考察（1960 年 -1962 年 ）」『アメリカ研究』33、アメリカ学会、1999 年、171-190 頁；Richard Flacks, *Youth and Social Change* (Chicago: Markham, 1971); Sara M. Evans, “Sons, Daughters, and Patriarchy: Gender and the 1968 Generation,” in *American Historical Review* 114, no. 2 (New York: Macmillan; American Historical Association, April 2009), 331-347; Jeremi Suri, “The Rise and Fall of an International Counterculture, 1960-1975,” in *American Historical Review* 114, no. 1 (New York: Macmillan; American Historical Association, February 2009), 45-68. また保守派の学生を、もしくは保守派とニューレフトをともに扱うのは、John A. Andrew III, *The Other Side of the Sixties: Young Americans for Freedom and the Rise of Conservative Politics* (New Brunswick, NJ.: Rutgers University Press, 1997); Rebecca E. Klatch, *A Generation Divided: The New Left, the New Right, and the 1960s* (Berkeley: University of California Press, 1999).

(4) 梅崎透「アメリカ『六〇年代世代』の形成――第二次世界大戦後の世代をめぐる政治」『歴史評論』698、校倉書房、2008 年、58-72 頁；Evans, “Sons, Daughters, and Patriarchy.”

50 年代の幸福な家庭から、60 年代の若者の反抗。この時期の若者論では突然現れた世代間の断絶が注目されるが、『スポック博士の育児書』を通した上記 2 点の考察は、むしろ時代の連続性を浮かび上がらせる。家族や社会が子どもを中心にすえて子どもへのまなざしが強まる一方、家庭外の変動に対応しながら家族は外に開かれた子ども像を創ったのであり、新たな人間性は親の世代から積極的に用意されたといえる。『育児書』は、こうした変化を生んだというより、当時の社会変動のために広く受容された本であり、当時の価値観を反映した点にこの著書の意義がある。このように本稿は、60 年代の若者を直接の対象とするのではなく、終戦直後の視座から、言説としての「世代」を検討する。以下の構成は、まず、育児の在り方がどのように変化し、スポックの『育児書』が世代言説とどのように結びついたのか叙述し、次に、育児と子ども像の変化を広く受容させた社会状況を検討し、最後に、その状況の中で高まった子どもへの注目が、若者をより細かく分類し、世代言説として残っていった様子を見たい。(5)

1　社会化の変容

子どもを社会の一員に育てること。これは古今東西の社会に共通する課題である。米国では 20 世紀半ばまでに育児と子ども観は変化し、そのなかでスポックの育児は広く歓迎された。やがてその「寛容な」子育てが新たな世代を生み出したという批判を受けながら、育児と世代言説は 1960 年代に結びついた。

（1）　育児と世代概念

まず『育児書』の意義と世代概念を説明したい。育児書一般の分析には注意点が 4 つある。(6) 第 1 に、社会運動での世代論にみられた分断線は、本稿の視角でも完全には消えないことである。歴史的に育児書の主な読者は中産階級だった。『スポック博士の育児書』が前例のないほど広く受容されたとしても、この本の対象が実は中産階級であり、その生活様式と異なる家庭では助言の実用が難しいという批判は当初からあった。したがって、本稿で扱われる家庭は白人中産階級とほぼ重なり、階級的、人種的な線は依然残る。

第 2 に、『育児書』を通して現れる世代論とは、大人によって生産・消費される言説だという点である。これは世代論全般にもあてはまる。「最近の若者は」という言葉は古代から繰り返されてきたが、世代差を認識し表現するのは多くの場合下ではなく上の世代である。そして育児書を書きそれを読むのも、もちろん子ども自身ではなく大人である。そのため、育児から

(5) なおここでは、『育児書』で「baby」「child」「youngster」「kid」と表記される言葉を「子ども」と呼ぶこととする。またスポックは 1976 年の第 4 版の『育児書』まで、子どもを指す代名詞として基本的に「he」を用いたが、本稿ではこれも「子ども」と訳す。

(6) 育児書研究における注意については以下を主に参照。Jay E. Mechling, “Advice to Historians on Advice to Mothers,” in *Journal of Social History* 9, no. 1 (Pittsburgh, PA.: Carnegie-Mellon University Press, Fall 1975), 44-63; Michael Zuckerman, “Dr. Spock: The Confidence Man,” in Charles E. Rosenberg, ed., *The Family in History* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1975), 179-207.

みる世代論は子どもに対する大人の視線や期待を示し、育児書の分析は親の世代や社会の価値観を研究する方法といえるだろう。

第3に、幼児の経験と成人の行動は直接に結びつけられない。一般に、寛容に育てられた子どもが新しい世代として登場したと考えられ、新たな育児法が異質な世代を生んだという言説が強かった。いくつかの学術研究でも、幼少期の体験が成人の行動に作用すると信じ、60年代の若者の活動が幼い頃の生活からどのように影響されたか分析した[(7)]。しかし幼少期と成人期を直結するこの推論に十分な根拠はなく、少なくとも本稿は、スポックの『育児書』が60年代の社会運動を形成したとは主張しない。

最後に、育児の専門家による助言は、親が実際にとった育児方法とは必ずしも一致しない。カリフォルニア大学バークリー校の人間発達研究所（the Institute of Human Development at the University of California, Berkeley）による調査やその他の実証的研究で、育児書にある公式の内容と親による現実の育児には隔たりがあると指摘されてきた。そのため『育児書』の内容だけから、家庭の育児を十分に知ることはできない。以上の4点から『育児書』が映し出すのは、戦後の大人が持った価値観であり、子どもや新たな世代をめぐる言説だといえる。

では「世代（generation）」とは何だろうか。それは「生まれた年をほぼ同じくし、時代経験を共有し、物の考え方や趣味・行動様式などがほぼ共通している一定の年齢層」と定義される。他方で、人口学や社会学における「コーホート（cohort）」の用語は「出生・結婚などの同時発生集団、同じ1年間あるいは5年間などに生まれた同時出生集団」を指す。コーホート分析は、異なるコーホートの加齢（aging）過程の比較分析を通して、人々の行動、状態、意識とそれらの変化の相違を分析する[(8)]。

この2つの言葉は似通い、これらを混同する研究もあるが、コーホートと比べて世代の概念は厳密な定義もなく使われやすい。1920年代の若い文化人を指す「ロスト・ジェネレーション」などの「世代」は、同時出生集団全体を必ずしも包含せず、世代論は時に一種の階級やエスニック集団としての意味合いを持って、特定の世代が他より劣る／優れるという「世代主義」の妄信に陥る危険さえある。しかしここで扱うのは戦後に生まれ60年代の社会運動に参加するが、構成員が流動的な集団である。そのため特定の期間に出生した集団というコーホートの内容に立脚しながらも、言説性も重視して、ここでは一貫して「世代」の用語を用いていく。

以上に述べた育児にみられる社会化の変容と世代言説とは密接に結びついている。世代間に違いをもたらす経験には戦争や、政治的革命、経済状況、技術革新などがある。だがフロイト

---

(7) David Riesman, *Abundance for What?: And Other Essays* (New York: Doubleday, 1964), 310; Keniston, *Young Radicals*, 11; Lynn Z. Bloom, *Doctor Spock: Biography of a Conservative Radical* (Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1972).

(8) 石田佐恵子「世代文化論の困難――文化研究における『メディアの共通経験』分析の可能性」『フォーラム現代社会学』6、関西社会学会、2007年、36頁 ; Norman B. Ryder, "The Cohort as a Concept in the Study of Social Change," in *American Sociological Review* 30, no. 6 (Menasha, WI.: American Sociological Society, December 1965), 844-845; Stephen Earl Bennett, Stephen C. Craig and Eric W. Rademacher, "Generations and Change: Some Initial Observations," in Stephen C. Craig and Stephen Earl Bennett, eds., *After the Boom: The Politics of Generation X* (Lanham, MD.: Rowman & Littlefield, 1997), 1-19.

心理学の伝統から、人格の中核は幼少期に形成されるという考えが支配的で、子どもの社会化が重要とされた。社会化とは「個人の行動の可能性をある範囲に限定し、演じることを期待される役割を個人に準備させることによって、ある集団での務めをその個人に託す」過程である。やがて社会化の主体が家庭から社会システムに移っていると認識されても、子どもに対する家庭内外での影響の変化が、新しい世代の出現という言説により強い説得力を与えたことに違いはなかった。(9)

（2） 厳格から寛容へ

歴史的にみて米国では、育児は厳格な躾から寛容な子育てへと徐々に移り変わっていったといわれる。たしかに外国人の観察者からみると、古くから米国は子どもを大事にする社会だった。しかし子どもに向けられる配慮は、第二次大戦後までにかつてないほど深まっていったのである。(10)

伝統的に米国では、育児とは理性的な訓練としてとらえられ、幼児は規則正しい生活をすべきという信念が強く、授乳や用便、睡眠などは厳格に管理するよう求められた。現在と比べて大きく異なる点は、子どもはアダムの原罪を持って生まれた存在であると考えられ、厳しい躾によって矯正する必要が強く説かれたことである。育児書は子どもを「it」と呼びさえした。しかし注意したいのは、親の権威への挑戦は、育児書の中では早い時期からあったことである。厳しい躾の時代に体罰は日常的と思えるかもしれないが、平手打ちや頭を叩くような酷い権威を専門家は批判した。たとえばホルトの育児書（Luther Emmett Holt, *The Care and Feeding of Children*, 初版 1894 年、第 14 版 1929 年）をみると、授乳や用便のスケジュールは規則的にすることが推奨され、躾の点では離乳の遅れや、指を噛む癖、おもらし、自慰を子どもに許してはならないと記される。ホルトの育児書は改訂を重ねても、その内容にほとんど変化はない。

だが一方で革新主義の時代には革新育児論（progressive parenting）が台頭し、新たな子ども像が現れる。『レディーズ・ホーム・ジャーナル』では、独立した子どもが唱えられるようになった。子どもは独立した個人であり、育児において指導や道理が奨められ、親は彼らに自分の野心や希望を押し付けてはならないという助言が現れる。ライバーの育児書（Benzion Liber, *The Child and Homes: Essays on the Rational Upbringing of Children*, 1921）は、「寛容な（permissive）」育児法を打ち立てた金字塔と位置付けられる。その思想の背景にはめまぐるしい社会の変容があり、子どもや人は柔軟で創造的であることが重要と考えられた。そのため子どもが習得すべきことは、目的や技能ではなく、常に新しい世界が提示する問題を解決するためのテクニックだった

(9) Ryder, “The Cohort as a Concept,” 852; Joseph F. Kett, *Rites of Passage: Adolescence in America, 1790 to the Present* (New York: Basic Books, 1977), 246.

(10) 米国の育児の歴史に関しては主に、Daniel R. Miller and Guy E. Swanson, *The Changing American Parent: A Study in the Detroit Area* (New York: J. Wiley, 1958), 7-21; Robert H. Bremner, “Families, Children, and the State,” in Robert H. Bremner and Gary W. Reichard, eds., *Reshaping America: Society and Institutions, 1945-1960* (Columbus: Ohio State University Press, 1982), 10-12; Nancy Pottisham Weiss, “Mother, the Invention of Necessity: Dr. Benjamin Spock’s ‘Baby and Child Care,’” *American Quarterly* 29 (Philadelphia: University of Pennsylvania, Winter, 1977), 519-546.

のである。[11]

他方で、心理学の立場からも育児法が提案されていった。行動主義の父ジョン・ワトソンの育児書（John B. Watson, *Psychological Care of Infant and Child*, 1928）は、育児法に大きな影響を及ぼした。ワトソンは人格形成に決定的なのは親の育児方法であると強調し、「たとえ数日間のうちでも、一度子どもの個性を損なう処置がなされれば、その損失が修復されうると誰が言えよう」と親に警告する。子どもの自立性は躾においても強調され、キスや抱擁は子どもを依存させるとワトソンは注意した。また、自立の訓練として、子どもは最初のかなりの期間には1人で遊ぶようにさせなければならない、と彼は述べた。

政府の育児書として、連邦児童福祉局が出版した『インファント・ケア』（U.S. Children's Bureau, *Infant Care*, 初版 1914 年）は心理学的育児法に影響され、1942 年には内容を全面的に改訂した。たとえば 1914 年では幼児は危険で強い衝動をもった生き物とされ、母親は原罪にまみれた子どもの本能とたゆまなく格闘しなければならないと書かれたが、1942 年には子どもはほとんど無害なものとして描かれる。

1920 年代から 40 年代にかけて革新育児論と心理学的育児が絡まり合いながら、より寛容な子育てが育児書の基調となっていった。しかしその裏では、幼少期を人格形成の決定的時期とみる心理学が、誤った育児は永遠の疵を残すと主張し、より重い責任と心理的負担を親に与えていた。多くの育児書が流布してそれらを熱心に読めば読むほど、親の不安は膨らんでいったのである。さらに医療の専門化が進み医者への依存が一般的に高まると、子どもの病気や健康について親の自信はまた薄れていった。やがて専門家からも、親はもっとリラックスしなければならない、という声が上がるようになった。[12] こうした時期に、『スポック博士の育児書』が出版されたのである。

（3） スポックの子どもたち

スポック博士の『育児書』は 1946 年に、ハードカバーとペーパーバックとして同時に出版された。1960 年代末までに 57 年と 68 年の 2 度改訂され、当初の書名 The Common Sense Book of Baby and Child Care は、Baby and Child Care に縮められ、やがて Dr. Spock と言えば彼の『育児書』を意味するようになる。1952 年までに 400 万部が売れ、66 年までにはさらに 1400 万部、80 年代には総計 2200 万部の記録的売れ行きを示した。さらに 42 カ国で翻訳されて世界的に広まり、「聖書の次に売れた」とさえ言われたほどである。一時期は米国で少なくとも 5 人に 1 人の母親がこの本を持ち、ある統計では 64％の母親が『育児書』を読んだことがあったという。わずか 35 セントの廉価だったこともあり、ペーパーバック革命の恩恵を受けた結果であると

(11) Julia Mickenberg, "The Pedagogy of the Popular Front: 'Progressive Parenting' for a New Generation, 1918-1945," in Caroline F. Levander and Carol J. Singley, eds., *The American Child: A Cultural Studies Reader* (New Brunswick, NJ.: Rutgers University Press, 2003), 226-245.

(12) Keniston, *The Uncommitted*, 290-294; Stephanie Coontz, *The Way We Never Were: American Families and the Nostalgia Trap* (New York: Basic Books, 2000), chap. 9; Zuckerman, "Dr. Spock," 183.

も指摘されるが、これほど受容されたのは当時の価値観に本の内容が適合したことが大きいだろう。[13]

スポックはそれまでの革新育児論や行動主義の流れを汲みながら、母親に自信を持たせ負担を軽減させる意図をもって育児書を書いた。[14]「自分を信じなさい。あなたは自分が考えるよりはるかに多くのことを知っている」。「子どもを楽しみなさい」。スポックは親たちにこう語り、「良き母親と父親が子どものために好んでとる本能的な行動は、たいてい最良の行動なのです」と説いた。友人や近所、医者の様々な意見よりも「恐れずに自分自身の常識を信じ」、「自然な愛情」を子どもに与えることが大切だった。[15]

このようにして『育児書』は過剰な負担と不安を抱えた母親を安心させる効果を持ったが、そこには子どもへの信頼が伴っていた。子どもは自ら調整することができることを強調し、伝統的な厳しい躾や親の押し付けにスポックは異論を唱え、自発的な成長を重視した。スポックはイェール大学の著名な研究者アーノルド・ゲセルの説に従い、子どもの発達過程は両親の影響から独立した必然のパターンを持つと考えていた。[16]幼児の気質は愛想がよく、分別があるものであり、原罪と危険な衝動を持つ小さな野蛮人というかつての子ども像を否定し、スポックは人間の本質は自然と調和に向かうと主張したのである。

『育児書』はその普及から当然、様々な方面から反響を呼んだ。スポックの姿勢は「寛容な」育児法として特徴づけられ、評価と批判はこの点に焦点が当てられることが多い。しかし寛容そのものは革新育児論から議論されてきたものであり、スポックが初めて唱えたわけではない。総じてスポックの『育児書』はラディカルな内容でなく、育児書の系譜上にありつつも当時の問題に柔軟に対処しようとした著作というべきであり、専門家の評価はそうした性質を裏付けていた。医者、看護婦、心理学者、ソーシャル・ワーカーなどの専門職は全般的にスポックを評価した。たとえばある医者は 1967 年にスポックの業績を「テキストとしてこの分野の古典であり、世界中に受け入れられた」と称えた。また、4 人の子どもの母親でもある小児科医は、『育児書』が「人々に物事には方法が 1 つだけでないという考えを伝え、選択を与えることによって親を前よりリラックスさせた」と、医者の助言に右往左往する親を落ち着かせた効果の意義を認めている。

しかしまた、スポックの上流・中産階級志向を批判する者もいた。『育児書』に描かれる家庭とは、2 人の親、常に家にいて子どもの世話ができる母親、さらに子ども 1 人に 1 つのベッ

---

(13) Bloom, *Doctor Spock*, 101, 145-146; Zuckerman, “Dr. Spock,” 184, Charles E. Strickland and Andrew M. Ambrose, “The Baby Boom, Prosperity, and the Changing Worlds of Children, 1945-1963,” in Joseph M. Hawes and N. Ray Hiner, eds., *American Childhood: A Research Guide and Historical Handbook* (Westport, CT.: Greenwood, 1985), 533-585; John Patrick Diggins, *The Proud Decades: America in War and in Peace, 1941-1960* (New York: Norton, 1988), chap. 6; Thomas Maier, *Dr. Spock: An American Life* (New York: Harcourt Brace, 1998), 202.

(14) スポックの思想の源泉はフロイト、ジョン・デューイ、マーガレット・ミード、エリク・エリクソンらにあるといわれる。Zuckerman, “Dr. Spock,” 204; Strickland and Ambrose, “Changing Worlds of Children,” 540.

(15) Benjamin Spock, *The Common Sense Book of Baby and Child Care* (New York: Duell, Sloan and Pearce, 1946), 3-4.

(16) Bloom, *Doctor Spock*, 125.

ドというような、中産階級をモデルとしていた。そのため労働階級の家族や働く母親、狭いアパート暮らしの一家などには、『育児書』の助言を実践することは難しかったのである。またスポックのいう家族とは核家族であり、親族や拡大家族は現れない。その結果、子どもに対する両親の時間と献身は増加していき、特に母親は 1 日中子どもに対して注意を向けなければならなくなる。したがってリラックスさせる言葉とは裏腹に、親の負担はかえって重くなったという指摘もあったのである。(17)

だがスポックを最も非難したのは、1960 年代後半の学生運動に直面した政府だった。アイゼンハワー、ニクソン両大統領と親しかったノーマン・ピール博士（Dr. Norman Vincent Peale）は、『育児書』の「寛容」を「好きな時に子どもに食事を与え、泣かせないようにさせ、あらゆる欲望を満足させる」ことだと解釈した。そして「史上最も不躾な時代」の責任はスポックにあると、博士は酷評したのだった。ニクソン政権の副大統領スピロウ・アグニュー（Spiro Agnew）も、学生活動家は「スポック博士の本で育てられ、寛容の思想が彼らの支持するすべての方針に行きわたっている」と述べた。政府の外でも、ウィリアム・バクリー（William F. Buckley, Jr.）ら保守派が新しい育児を攻撃した。幻滅した親たちもこれに加わり、スポックに「今日のヒッピーはあなたのせいだ――親よりも子どもの方が賢いと教えたのだから」と非難した。(18) 親の世代の政治や文化から逸脱する新たな「世代」を前に、多くの者たちはその原因を寛容な育児を広めたスポックに求めたのである。やがてスポックが平和運動に加わり政治活動に関与しながら、学生運動や過激派に理解を示す言動を行うと、批判はさらに強まった。しかしそれらの批判は、スポックの育児法が子どもの放任を意味するという誤解の上に、育児の寛容さと社会的な放埒さの混同があり、的を射た批判では全くない。それでも、新たな育児が新たな世代を育てたという考えが流布し、疎通を拒むような深い断絶を持った「世代」の概念が強められた様子が見てとれる。

2　社会化変容の状況

学生運動に批判的な保守派を中心に、子育ての変化と新しい世代の台頭を結びつける言説が広まったが、ではなぜ育児と子ども像は変わったのか。言いかえれば、社会化を変容させた社会状況とは何だったのか。ここでは再び戦後社会に目を戻し、家庭の育児を社会の変動とともに見ていく。20 世紀半ばの米国家族を階級や職業文化という要素とともに検討すると、新たな子育ては単なる甘やかしではなく、変化する社会への中産階級核家族の適応と考えられる。

---

(17) Keniston, *The Uncommitted*, 290-294; Bloom, *Doctor Spock*, 140-147; Weiss, “Mother, the Invention of Necessity,” 539-540.『育児書』の基本は中産階級志向だったが、働く母親への言及もある。Spock, *Baby and Child Care* (1946), 484-488.

(18) Bloom, *Doctor Spock*, 132-133; *National Review*, 16 (November. 3, 1964), 944; Weiss, “Mother, the Invention of Necessity,” 542-543.

（1） 家族、メディア、仲間集団

『育児書』の内容を見る限り、子どもの自立性や自発性を尊重し、「寛容」であることを強調するため親の厳格な権威が弱められているように思えるが、実際はそうではない。むしろ1950年代の米国では慣習的な家族形態が息を吹き返し、伝統的な核家族が人々の感情生活の中心となったのである。

核家族の強化には人口動態における2つの現象が作用した。ベビーブームと郊外化である。ベビーブームは1946年から始まり57年を頂点として64年まで、高い出生率が続いた期間で、その間に生まれた子どもの数は約7644万人である。世界恐慌や第二次世界大戦の15年間をへて、多くの米国人は家庭と子どもを持つ意欲にあふれていたといわれる。構造的な変化としては人口に占める結婚の増加、子どものいない既婚者の減少、初出産時の女性年齢の低下、一人っ子の割合の減少などがあった。要するに、20世紀半ばには長年の傾向に逆行して、多くの人々がより若いうちに結婚して、より多くの子どもを産んでいったのである。(19)

さらに歴史的な都市化の流れに反して、米国人は都市から郊外へと移動していった。GI権利章典など連邦政府の援助や、レヴィットタウンにみられる一戸建て住宅の大量供給によって、多くの若い人々は夢のマイホームを新しく開発された郊外で手にすることができた。1940年から60年の間に住宅所有者は倍増し、初めて賃貸よりも所有の数が上回ることになる。また、1950年から70年の20年間で郊外の人口は3600万人から7200万人へと膨らみ、人口全体の増加の83％は郊外でのことだった。こうした郊外への移動には、子どもの存在が与っている。不良や少年犯罪がはびこる都市は子どもの教育にとって好ましくない環境であり、子どものいる家族には部屋を貸さない大家もおり、育児に十分な時間と場所、静かな環境が得られる郊外へ引っ越す親が多かった。ある母親は冗談めかして「昔はひどく狭苦しくて。今はもう子どもの上に座らなくていいですよ」という。(20)

60年代の若者の親にあたる、戦後の若い夫婦たちは早くに結婚して子どもを産み、郊外で家を購入して家庭を築いた。すると家庭の意味は強まり、性的役割分担も伝統回帰した。仕事や社会では得られない満足感を与えてくれる場所として、家族は「感情生活の中心」となる一方、父親の揺るがない権威が認められ、女性は妻や母として重視された。50年代の若い夫にとって妻は「人生の欠かせない補助者」であり、生活上の細かいことは任せても大きな決断は夫が決めるという意識があった。またある調査でも、郊外に住む母親たちは妊娠が分かると誇らしかったと証言し、母親であることが自分たちの第一の務めだと語った。これは当時の文化的影響を受けた結果であるが、女性たち自身が母性に対して尊厳と自尊心を持っていたことは確か

(19) Landon Y. Jones, *Great Expectations: America and the Baby Boom Generation* (New York: Ballantine, 1980), 2, 10-39; Paul C. Glick, *American Families* (New York: Wiley, 1957), 192-201.

(20) Riesman, *Affluence for What*, 313; Maier, *Dr. Spock*, 201-202; Strickland and Ambrose, “Changing Worlds of Children,” 541-543; Jones, *Great Expectations*, 43; Herbert J. Gans, *The Levittowners: Ways of Life and Politics in a New Suburban Community* (New York: Pantheon Books, 1967), 236.

である。[21]

マックス・ラーナーは当時の米国中産階級の家庭に悲観的で、かつての拡大家族と比べて、「壊れた家族、不安定な子ども、所有欲の強い女性」で構成される「米国の家族は、無秩序な集まり」だと批判する。しかしケニストンの見解では、中産階級に代表される核家族は、その孤立ゆえに、地理的・職業的・社会的移動の自由度が高く、子育ての自由の余地もまた大きい。[22] 自分の故郷や親族から離れて郊外住宅地に移った若い夫婦たちは、自分の親からでなくスポック博士から助言を得て子どもを育てようとした。戦後における『育児書』の幅広い需要の背景には、ベビーブームと郊外化の波に乗る中産階級の核家族があったのである。

しかしこの時代に子どもへの影響力は、家族から別の主体へと移ったと指摘される。社会化の主導権を新たに握ったのは、メディアと仲間集団といわれる。ベビーブーム起点の 1946 年には 6000 台ほどしか生産されていなかったテレビは、1948 年に 10 万台、59 年には 5000 万台が普及して 86％の家庭に行き渡り、67 年までに 98％が持つに至った。市場の飽和は一家で複数台のテレビ所有につながり、子どもはラジオやテレビを自分の部屋で楽しむことができるようになった。[23] 子どもになんらかの社会観を与えるのは、テレビ、音楽、小説、コミック雑誌などであり、若者は「ビート世代」や、プレスリーやビートルズに熱中する「ロック世代」など様々な呼び名をつけられることになった。

そうしたメディアとともに親の道徳的独裁に挑戦したといわれるのが仲間集団である。リースマンが『孤独な群衆』でいうように、他人指向型の社会では子どもが同じ年齢層の仲間集団の中でうまくやっていけることが重要になる。そこでは道徳律や強烈な個性が後退して、移ろいゆく仲間の趣味を鋭敏に感じ取り、彼らに「適応」することが社会的に認められることを意味するようになったのである。したがって親や教師の大人たちは影響力を低下させ、陪審員としての仲間集団に社会化の権限が移譲されたと考えられた。

子どもの意識を発信する仲間集団のサブ文化は、大人によって用意された制度とメディアの手で育まれたといえる。50 年代の郊外では子どものためのグループが多数形成された。カブ・スカウト（ボーイ・スカウトの下で 8-11 歳の男子が加入）の参加者数は、1949 年の約 76 万 6000 人から倍増し 56 年には 160 万人となった。女子のガール・スカウトやブラウニーズも同様に 1950 年の 180 万人から 60 年には 400 万人へと大幅に増加した。野球のリトル・リーグも、1950 年の 776 から 60 年の 5700 へと膨れ上がって全盛期を迎えた。子どものためのグループが数多く作られ、この時期は子どもの黄金期とも呼ばれる。大人指導の集団で組織された子どもは、同じ年齢層と集まる機会と時間を増やし、自分たちのサブ文化を形成していった。その媒体となったのは主にレコードで、音楽の流行を仲間内で確認しながら、大人とは切り離され

(21) Maier, *Dr. Spock*, 203-204; Robert R. Sears, Eleanor E. Maccoby, and Harry Levin, *Patterns of Child Rearing* (Evanston, IL.: Row, Peterson, 1957), chap. 2; Riesman, *Affluence for What*, 305-306, 318; Keniston, *The Uncommitted*, 278-280.

(22) Max Lerner, *America as a Civilization: Life and Thought in the United States Today* (New York: Simon and Schuster, 1957), 550; Keniston, *The Uncommitted*, 273-275.

(23) Maier, *Dr. Spock*, 201; Jones, *Great Expectations*, 47-49.

た子ども独自の文化を培っていったのである。[24]

社会化の影響力が家族からメディアや仲間集団へと移行した事実は広く認められる。その変化の中で親はかつてのような規律を与える者ではなく、仲間に溶け込めるよう配慮する調整者となった。だがこの変化は、新たなメディアや制度の浸透によって親の影響力が脅かされたというよりも、社会全般の変動に家族が、ほとんど無意識的に、適応しようとした結果であると考えられる。そうした傾向を示唆するのが、育児と社会階層の関連を調査した研究である。

（2） 階級と職業

子育てはどのような社会的要素に規定されるのか。この問題関心から第二次大戦後の多くの研究者は、階級と育児の関係に注目した。ロバート・シアーズらは 1951 年から 52 年にボストン近郊を調査して、育児における階級的差異を紐解こうとした。その結果、労働階級と比べ中産階級の子育ては全般的に、より寛容で罰が厳しくなく、子どもに課す制限や要求が少ないと結論付けられた。そのため、親の階級や教育水準が育児方法を形作ると観察者たちはみた。

ハーバート・ギャンズは 50 年代末にレヴィットタウンの 1 つを調査し、階級と育児の同様の関係を指摘する。職業、教育水準、宗教の違いをもとに階級の違いを分析すると、労働階級の家庭では大人によるルールが厳格で、子どもらしい行動は厳しく躾られ、学校での成績でも子どもにより強いプレッシャーがあった。下層中産階級では、ある程度子どもらしく振る舞うことも許されたが、甘やかしを嫌って親は子どもを厳しく育て、子どもを個人として扱ったがユニークさは求めなかった。そして上層中産階級では、子どものユニークな成長に配慮し、そうするために親が手助けすることがあった。このように、親の社会的地位が上がるにつれて、子どもの躾は厳しくなくなり、子どもの個性が尊重されるようになることが観察されたのだった。[25]

しかし家庭の育児と社会との関係において、最も注目に値するのはダニエル・ミラーとガイ・スワンソンの研究だろう。彼らは親の階級よりもその職業文化に焦点を当て、2 つの類型を見出した。自営業や企業経営者といった「企業家的」な職の家庭では、克己精神や自制、独立性が強調される傾向があり、それに対してホワイトカラーの「官僚的」な仕事を持つ親は、子どもを順応的で適応能力のある人間となるよう促す傾向があった。ミラーとスワンソンはリースマンの研究と照らし合わせ、「官僚的」な家庭で他人指向型の意識が強く見られるという。

子どもをいかなる人間に成長させるかという社会化の問題に向き合った時、多くの親は自らの社会経験を参考にするだろう。この時期にホワイトカラー層が増加し、それにともない社会が必要する人格は変化した。企業で働く者たちが増え、自営業や企業家のように仕事の命運が 1 人の双肩にかかることはなくなる一方、新たな圧力が加わった。巨大企業はメンバー間の潤滑な人間関係に依拠するようになり、協調的で順応しやすい人間を求めたのである。出世では、

---

(24) D・リースマン『孤独な群衆』加藤秀俊訳、みすず書房、1964 年、56-72 頁 ; Kett, *Rites of Passage*, chap. 9; Jones, *Great Expectations*, 64-65; Ryder, “The Cohort as a Concept,” 854-856; Roger Cox, *Shaping Childhood: Themes of Uncertainty in the History of Adult-Child Relationships* (London: Routledge, 1996), chap. 7.

(25) Sears, *Patterns of Child Rearing*; Gans, *The Levittowners*.

能力だけでなく社交能力も重要になり、人間関係のストレスも増幅した。したがって独立独行を重んじる経営者と、企業の中で生きる組織的職業との間に、期待される性格と育児の差異が生じたのである。ミラーとスワンソンは育児の変化の源流を、こうした社会と職業の変動に、つまり「オーガニゼーション・マン」の集団倫理に見てとる。(26)

以上のことから育児の思想に影響を与えるのは、子どもへの期待や理想像だけでなく、親の生きる世界と不安であると言える。中産階級の親は自然に、企業組織が重要になっていく社会で生きていけるように子どもを育てていった。その傾向は『スポックの育児書』にも反映されている。スポックが説く子どもの自信と不安の管理とは、新たな不安を抱えた親にとって特に重要だった。

（3） 外に開かれた子どもたち

スポックの『育児書』では自信が大きなテーマとなる。これは先述したように専門家の助言にあまり悩まないための母親の自信も意味するし、子どもが持つ自信も指す。スポックが幾度も強調する自然や本能の有利さは、組織の中で働くうちに生じるストレスや自分の存在意義への不信を多少とも和らげる効果がある。自信は企業社会で成功するのに必要な社交能力に欠かせない要素である。親が身を置き、さらにその子どもを送り出すと予想される企業組織では、業績とは個人の達成ではなく個人間のそれである。仕事の評価は、個人の内的な才能よりも、チームの協力に向けられる。したがって仕事は社交関係の問題となり、子どもに協調と適応の重要性を教えようとしたのである。もちろんスポックはホワイトカラーを念頭に置いて『育児書』を書いたわけではないが、図らずもその内容が当時の社会状況に合致していた。(27)

スポックは子どもの社交能力の高さに注意を向けさせる。幼児は「合理的で友好的な人間」に生まれたのであり、十分な交わりを得られれば子どもは「人を愛する人物」に成長するのだと。親の役目は自分を信頼する子どもの力を助長させることだと、スポックは説いた。「ありのままを認められた」子どもは「自信」と「自分が持つあらゆる能力を最大限に利用する精神」をもって成長することができる。それに対して「親に十分認められなかった子ども」は「自信を欠いて成長し」、「その頭脳や能力、身体的魅力を決して利用することができない」。そして自信を持てば子どもは外に出るときに安心感を持ち、仲間との間で成長することができるようになる、とスポックは親に伝えたのだった。(28)

スポックは子どもないし人間の調和性を前景化させるが、そのあまり、子どもの世界の諍いや衝突がほとんど見えなくなる。『育児書』の子どもは個性をめぐって他人と競うことはなく、いじめに遭って反撃することさえない。なぜなら彼らの仲間は遊び友だちであり、競争相手ではないからである。子どもたちが仲間内でそれぞれの性格の違いを見出しても、異物との衝突

(26) Miller and Swanson, *The Changing American Parent*; W・H・ホワイト『組織のなかの人間――オーガニゼーション・マン』（上）岡部慶三・藤永保共訳、東京創元社、1959 年。
(27) Zuckerman, “Dr. Spock,” 192-200.
(28) Spock, *Baby and Child Care* (1946), 19, 22.

はありえない。もし子どもの喧嘩があったとしても、親が適切に処理すれば解決される。なぜなら諍いが取り返しのつかない不和にまで深化することがないからである。スポックによれば、衝突は正常な社会関係ではなく、仲間からの疎外は病理的なものだった。(29)

仲間とともにいること、つまり帰属性が子どもにとって不可欠なものだと『育児書』は説明する。そのため子どもの孤立の処方は「親との触れ合い」を増やすか、「遊び相手となる同じ年齢の子ども」を見つけることである。決して子どもに他の仲間と自分とは違うと考えさせてはならない。子どもは友だちと「同じように服を着て、おしゃべりをして、遊ぶ」ことが許されなければならない。「近所にいる他の普通の子どもたちと同じような権利」が認められないといけない。子ども同士の決まりごとと相反するのなら、親は自分の考えを押し付けるべきではないのである。(30)

ここでスポックは、子どもに対する親の厳しい影響力行使に警告を与える。しかしそれは、社会化過程における完全な自由を子どもに与えることを意味しない。スポックは子どもの従属する先を、親密な家庭からより緩やかな外社会へと移そうとしたと見るべきだろう。「親から離れようとしている」子どもは「他の子どもたちの言動により注意している」だけであり、子どもが「自分自身を家族から解き放つこと」は、ほとんどの場合「行いのモデルを同じ年の子たちに移している」だけなのだという。子どもの行動の原理は同じ年齢の他の子どもたちにあり、彼ら仲間集団から離れた孤高は『育児書』では認知されない。(31) これを『孤独な群衆』のいう、自己内に道徳律を確立する内部指向型から、周囲に合わせて規律を柔軟に選びとる他人指向型への変化と並べると、スポックはリースマンと同じ時代精神を指摘し、それを促進する助言を与えていることがわかる。

そして『育児書』が出版された 1946 年がテレビやロック音楽の普及に先行している事実を考慮すれば、社会化の影響力が親から仲間集団へと移ったことは、家庭が外社会から浸食された結果ではないと考えられうる。組織の中で働くことが珍しくない社会、また科学が進歩して技術や価値観がすぐに時代遅れになる可能性のある時代において、親の審判に依拠するのではなく自分への信頼を確立し、家庭の中ではなく同じ年齢の仲間集団の中で協調できる子どもこそ、社会での成功に近づくと考えられたのである。1950 年代の個人にとって適応は不可欠な性質だった。それと同じく中産階級の家族もまた、近隣社会ひいては外社会に適応することに躊躇せず、自分の子どもたちを外に開かせていった。

3　子どもへのまなざし

社会化過程における家庭の影響力が相対的に弱まったのは、親が子どもを外に送り出した面

(29) *Ibid.*, 300-304.

(30) *Ibid.*, 318-320.

(31) Benjamin Spock, *Baby and Child Care* (New York: Hawthorn Books, 1968), 422; Spock, *Baby and Child Care* (1946), 312-313, 315.

がある。かといって親は子どもを放任したわけでなく、1950 年代の家庭では多くのことが子どものためになされ、子どもの存在が以前より強くなった。しかし家庭や社会における子ども中心（child-centeredness）の背後には、強い大人指向が存在した。子どもへのまなざしは両義的であり、その強い視線は子どもと大人との距離を広げ、両者の境を曖昧にさせた。

（1） 子ども中心

1950 年代までに中産階級の家族にとって、子どもは不可欠な一片となっていた。家族関係において従来は夫婦間の親密な「交際（companionship）」が強調された。これは 19 世紀に由来し、1920 年代に最も盛んになった価値観である。愛情と相互関係を重視して中産階級の結婚の情動的な性質に価値を置き、夫婦として過ごす時間が尊重された。そのため、幸福な結婚は仲睦ましい夫婦関係に重心を置き、必ずしも子どもが前面に出されなかった。

しかし第二次大戦後のベビーブームは結婚観を大きく変え、重心を夫婦から子どもへと移動させた。夫婦だけでなく「家族みんな」の生活が大きく取り上げられ、親も子どもも含めた家族全体の活動や楽しみ、達成感を意味する「一体感（togetherness）」が「交際」に取って代わったのである。もはや幸福な家庭生活は円満な夫婦だけでは足らず、子どもの存在が必要条件となった。(32)

戦後の郊外化も、子どもの重要性の高まりによって多分に支えられていた。郊外への移動の理由として――第一の理由ではないにしろ――多くの親たちは子どものためであると証言し、先述したように、郊外の魅力は育児のための場所や時間、快適な環境だった。ギャンズの調査結果もこの意識を裏付ける。かつて都市居住者だった全ての家庭では「子どもとの時間をもっととりたかった」と答え、回答者の 72％が「家と庭の修理や手入れのおかげで」「親と子どもが一緒に何かをする機会」が増えたと言った。また、子どもがある程度大きくなると、買い物、レクリエーション、他の家への訪問などで家族一緒の時間が増えたという声もあった。都市から郊外へと移り通勤時間が延びたことで家族の時間が短くなるように思えるが、多くの郊外居住者にとって通勤はそれほど苦ではなく、子どもと一緒にいる時間が増えたのは郊外の生活と持ち家によるところが大きかったようである。(33)

子どもはある意味で理想化され、その純粋さが幸福な家庭の基礎とされた。50 年代におけるリースマンのインタヴューで、ある学生は将来の家庭についてこう答えた。「私は心の豊かさで満ちた家を持ちたいです。子どもほど人間らしいものはありませんよ」。子どもは「心配も責任もない、幸福と喜びの時代」とみなされた。ひるがえせば、大人はそうではないということである。大人は「誰も気にかけない」「男女は自分の道を作らねばならない」「自分の足で立たなくてはならない」時期だった。子どもは社会的な役割も責任も負わないような、誰にも脅かされない、あるいは絶対に守られるべき存在だった。大人は社会で満たされない気持ちを

(32) Jessica Weiss, *To Have and to Hold: Marriage, the Baby Boom, and Social Change* (Chicago: University of Chicago Press, 2000), 116, 118-119, 124-131.

(33) Gans, *The Levittowners*, chap. 10; Riesman, *Affluence for What*, 313; Maier, *Dr. Spock*, 201-202.

埋め合わせるために、このように子どもと家庭を過度に美化したといえる。[34]

大人の支えとなった子どもは、その反面では重荷でもあった。「子どものためにやろう」という言葉通り、郊外の家庭では多くの時間が子どものために費やされた。保育園やリトル・リーグなど様々な活動の際には母親が送り迎えをしなければならず、子育ては主に母親が担うものだったため、女性の育児の負担は当然いや増した。さらに育児に快適だったはずの郊外は、女性の不満をかえって膨らませた。レヴィットタウンのある母親は都会の楽しさを思い出しながら、現在の環境のストレスについて語った。「街では私は時折出かけることができましたが、ここでは無理です。休む間もなくてうんざりします（…）四六時中子どもといると張り詰めてしまって」。郊外では近隣に親族はなく、夫は仕事で遠くにおり、女性は子どもとともに郊外の家に閉じ込められていたことは、フェミニズムでもよく指摘されることである。また「交際」が「一体感」にとってかわると、夫婦はその 2 つの価値観を両立させることが極めて難しいと気づいた。子どものいない時間が稀になると夫婦として過ごすことが難しくなり、夫と妻との間に子どもが割り込むように、子育ての期間には夫婦は離れていく傾向がよく見られたのである。しかし多くの親たちはこれを一種の税金として考えていたようだった。[35]

（2） 子どもの背後にいる大人

『スポックの育児書』には 19 世紀後半に由来する子ども重視の思想がある。その「寛容な」育児は「子ども中心」と同義であり、『育児書』の子育てが広まったことで子ども中心はさらに補強されたと、多くの読者や研究者から捉えられた。革新育児論において子どもは希望や創造、刷新と結びついていた。個人として成長する自由を子どもに与える意義が説かれ、自発性や、独自性、自然な好奇心を備えて自由に思考する若い人々が育つと考えられた。そうした育児を通して、新しい、より民主的で平等かつ活力ある社会秩序が発展すると革新育児論者たちは展望したのである。[36] こうした思想を踏まえ、スポックは寛容な育児の大切さを書き記した。しかしながら、よく混同されたように「寛容」と「子ども中心」を同一視することはできない。なぜなら子どもの健康に気を遣う親が厳格である場合も、寛容な親が子どもに無関心である場合もあるからである。

スポックの「寛容」については 2 つの性質を指摘することができる。第 1 に、寛容とは優しく穏やかな子育てというより、さらなる配慮と時間を子どもに与えることを意味した。『育児書』の親は以前よりも思慮深く、責任をもって、子どもの必要と望みに注意するように努力した。実際、これは非常に時間と手間のかかる育児形態であり、母親もおそらく父親も歴史上かつてないほど子どものために時間を費やした。その帰結は、親の負担の増加である。スポック

(34) Riesman, *Affluence for What*, 322; Keniston, *The Uncommitted*, 310-315; Kett, *Rites of Passage*, 253-254; Elaine Tyler May, *Homeward Bound: American Families in the Cold War Era* (New York: Basic Books, 1988).

(35) Maier, *Dr. Spock*, 201; Keniston, *The Uncommitted*, 290-294; Gans, *The Levittowners*, 230, 235; Weiss, *To Have and to Hold*, 124-131.

(36) Mickenberg, “The Pedagogy of the Popular Front,” 229-235.

は「子育てを楽しみなさい」と母親の不安を和らげる言葉を伝えても、その実、彼らにより多くの仕事を担わせていた。[37] さらにスポックは別の心理的不安を作った面もあった。母親が「子どもを見つめること――子どもがどの段階にあるのか見ること」に注意を払うことが、子どもの成長には必要だった。その際に子どもが「あまりに横柄な規律」の下に置かれなければ、子どもは不作法にはならない。また『育児書』の母親は「うまく励ませたか、それとも少し横柄だったか」と常に内省する。要するに母親には、優れたバランス感覚をもって常に子どもを監督する役割と、その結果の自己評価とが内在化されたのである。[38]

第 2 に、『育児書』の本質は寛容にではなく、衝突の回避にあるといえる。[39] スポック自身によれば、「厳格か寛容かは本当の問題ではない」。良心的な親は「穏やかな厳格さでも穏やかな寛容さでも、良い結果を生む」ことができる。それに対して不安な親は「自信がなく、ためらいのある寛容さで、あるいは残酷な感情からくる厳格さで」不毛な結果に終わる。スポックにとって真の問題は、「親が子どもの監督に注ぐ精神」だという。しかしこの「精神」が明示されることはなく、読み取れるのは統制と放縦との間にある育児か、「家族を愛する」気持ちという程度の意味だろう。[40] 寛容さが用いられるのは、親と子どもが無用な諍いをしないためだった。寛容な親は「子どもが指導してほしいのなら」、「如才なく」子どもを指導する以上のことはしない。もし子どものわがままに折れることができなければ、子どもの苛立ちを刺激せずに、その「気持ちを楽しいこと」に移すことによって、注意を逸らすこともできた。[41] 親密な家族の中で衝突を避ける手段として「寛容」は利用されるべきものだった。

このような寛容と同じく、「子ども中心」も文字通りに解釈できない。ギャンズが調査したレヴィットタウンの上層中産階級に属する医者や弁護士の家庭では、親は社交的で家庭の重要性が他の社会層と比べてやや薄い。夫婦はしばしば家庭の外でそれぞれ別の興味を持ったが、彼らの共通の関心の 1 つが子どもだった。上層中産階級の両親は、スポックの『育児書』に見られるように、個人として子どもが成長することを期待していた。しかし忘れてはならないのは、自発性と独創性をもった個人に育つことをまず願うのは、子ども自身ではなく、親だということである。個人としての成長という目標を達成するために、親が子どもの成長に方向性を与え、いわば「子ども中心的」かつ「大人指向」の子育てだった。[42]

このように「寛容」は、当時の社会で誤解され非難されたような「甘やかし」とは区別されるべきものであり、他方で衝突を避ける術である「寛容」と、「子ども中心」とともにある「大人指向性」は、子どもの背後にある大人の存在を浮かび上がらせる。第二次大戦後の家族にお

(37) Strickland and Ambrose, “Changing Worlds of Children,” 570-573; David Popenoe, *Life without Father: Compelling New Evidence that Fatherhood and Marriage are Indispensable for the Good of Children and Society* (Cambridge: Harvard University Press, 1999), 129-130; Weiss, “Mother, the Invention of Necessity,” 531-534.

(38) Spock, *Baby and Child Care* (1968), 245, 247.

(39) Zuckerman, “Dr. Spock,” 202-204.

(40) *Ibid*., 7, 336; Spock, *Baby and Child Care* (1946), 145-158.

(41) Spock, *Baby and Child Care* (1946), 214-215, 267-269; Spock, *Baby and Child Care* (1968), 234, 276, 335.

(42) Gans, *The Levittowners*, 30; Kett, *Rites of Passage*, 266-269.

いて「一体感」の価値観が高まると、幸せに満ちた家庭にとって子どもは欠かせない一片となった。「感情生活の中心」である家庭のさらに中心には子どもが置かれ、一見すると子どもの存在が強まったが、社会からの避難地としての核家族を保護するために、家庭内の諍いは避けられ、子どもの進む方向は親によって指示されたのである。「子どもの黄金期」に子どもは一種の王様となったとも言われたが、親はそれを管理するマネージャーだった。

（3）子どもでも大人でもなく

第二次大戦後のベビーブームは郊外化の一因となって家族観を変えもしたが、その影響力は消費にも及んだ。市場の目にはベビーブーマーは魅力的な顧客に映った。家庭の中だけでなく、社会においても子どもは中心に置かれ、子どもへの視線は強まった。さらにそのまなざしは、人間の発達段階に関する考えも変えていったのである。

早くも 1948 年に『タイム』誌は、その前年に米国社会に「280 万以上の消費者」が加わったと報じた。ベビーブーム最盛期の 1958 年には、『ライフ』誌は子どもで溢れたカバーと、「飛躍的な誕生――ビジネスの鉱脈」「衣食住の新たな市場」と新生児たちを呼ぶ記事を掲載した。ベビーブーマーは誕生した瞬間から市場に注目され、おむつから玩具、レコード、車へと、成長するにつれて常に多くのモノを消費した。彼らは 10 代の時にソフトドリンクの 55%、映画チケットの 53%、レコードの 43%を消費し、ファッション、外食産業、雑誌にとって最大の客層だった。(43)

ベビーブーマーが殺到したのは市場だけではない。教育制度は巨大な人口の子どもたちを受け入れるのに必死だった。1950 年からの 20 年間で小学校の入学者数は 66%増加し、特に人口増加が著しかったカリフォルニア州では、50 年代に 1 週間に 1 校のペースで開校し、ロスアンジェルスは 10 年足らずで 62 校の小学校、26 校の中学校、10 校の高校を設けた。教育水準も向上し、第二次大戦前に 38%だった高校卒業率は、60 年代には 75%まで上昇した。1963 年から 73 年まで高等教育全体の入学者は 470 万人から 960 万人に倍増し、大学は一大経済ブームを享受する。(44)

教育と経済はベビーブーマーとその親たちを峻別した。1929 年からの大不況や第二次世界大戦を乗り越えた親と、生まれながら繁栄に浸かってきた子ども。高校を中退した親と、大学に入る子ども。人口全体で見た場合、2 つのコーホートの違いは明らかだった。しかしここで特筆すべきなのは、巨大なベビーブーマーを前にして、若い人々をより細かく分類するという文化的変化が起きたことである。50 年代から 60 年代に 10 代が市場における流行の先端となると「ティーンエイジャー」という言葉が注目され、さらに、ユージーン・ギルバート（Eugene Gilbert）によるマーケティング調査は「10 代市場（13-15 歳）」「サブ 10 代（9-13 歳）」「ジュニア（16 歳以上）」という分類を作りだした。(45)

(43) Jones, *Great Expectations*, 40-41, 84-88.
(44) *Ibid.*, 56-57, 93-94.
(45) Kett, *Rites of Passage*, 265.

心理学でも若者の意味は変化する。1904年にスタンリー・ホールは『青年期の研究』（G. Stanley Hall, *Adolescence*）によって「青年」の概念を広め、子どもと大人との間の人生段階を示した。米国において高校教育が普及するにつれ、青年期は高校時代を意味するようになり、60年代に大学生が増加すると青年期も21歳ほどまでに伸長されていく。青年概念と教育は密接に結びつき、身体的に大人と言えても経済的独立と社会的責任を伴わない者たちは、子どもでもなく大人でもない段階に位置づけられたのである。(46)

しかし60年代の若者は、教育制度の拡大だけでなく、自らの巨大さによって意味が変容していった。子どもと大人との継続性が含意される「青年」は、幼少期のクラブから大学まで同年輩の共同体で過ごし、変化に順応的だったベビーブーマーには必ずしも当てはまらなくなった。ケネス・ケニストンは、社会に不満を抱き社会運動に参加した当時の若い人々を説明するために、「人生段階としての若者（youth）」という概念を創造した。ホールの「青年」と同じく「若者」という言葉は真新しくはなかった。だが重要なのは、子どもから青年、大人へと上がる発達段階のコースから逸脱する、新たな人生段階が存在すると認識されたことである。容易に大人にならない者は「後期青年期」、「ヤングアダルト」、「青年の延期」など様々に呼ばれたが、ケニストンは単なる青年期の延長ではなく、個人的・社会的変化を引き起こしうる社会層の出現を見たのだった。(47) 同じような考えが『スポック博士の育児書』の改訂から観察することができる。

1946年初版の『育児書』の「思春期の発達」の項目は、思春期（puberty）について簡単に触れるだけで、毛や腺、皮膚など身体的変化を記述し、心理的変化はほとんど扱わなかった。だが57年、68年に改訂される度に心理的変化がより詳しく書かれ、扱われる年齢も10代前半の思春期だけでなく、青年期、そして20代の若者にまで伸びていった。『育児書』の思春期とは女子なら11-13歳、男子なら13-15歳の2年間を指す。この時期に身体が急激に成長するため心理的動揺「も」あり、「自意識が強く」「どんな欠点も誇張して悩む」こと、時には大人であると感じたり子どもに戻ったりして「帰属するところが全く分からない」ことがあるという程度しか、46年初版は説明しない。また青年期という言葉もあまり使われなかった。(48)

しかし57年第2版には、10代の心理的変化がより大きく取り上げられる。自意識の過剰で子どもは「自分が違う、異常だと思いこみやすい」。「批判されると、デリケートで傷つきやすくなる傾向がある」。また、青年は「親が十分な自由を与えてくれない」と嘆きながら、「自由への恐怖」を抱いている、とスポックは青年期の心理的複雑さを指摘する。親への対抗意識（rivalry）も芽生え、自分が「世界に立ち向かう者」だと青年期は考えるとスポックは説明した。一方で、スポックは心理的変化を述べるときには「思春期」ではなく「青年期（adolescence）」の言葉を主に用いるようになった。(49)

---

(46) *Ibid.*, 217-244.

(47) Keniston, *Youth and Dissent*, 6-7.

(48) Spock, *Baby and Child Care* (1946), 340-346.

(49) Spock, *Baby and Child Care* (1957), 418-421.

68 年第 3 版では、さらに心理的変化が詳述される。特に対抗意識に関する説明では、スポックの価値観が全面に出された。青年期の「反抗（rebelliousness）は、主に親への対抗意識の表明」だが、それはまた「世界を改善する、旧習を超える新しい方法を見つける、一大発見をする（…）ための努力をする若い人たちに動機となる力を与え」、「こうして世界は前進する」とスポックは反抗を社会的な善だとする。「もし子どもがよく出来ていれば、彼は抵抗や反抗を感じずにはいられない」のである。また、エリク・エリクソンを参照しながらアイデンティティの問題にも触れ、「若者」は「自分が誰なのか見出すために、親から自分を離さなければならない」と説明して、彼らのスタイルが「親の世代」と違わなければならないとスポックは述べる。用語についても、68 年版の「思春期の発達」の項目には「思春期」や「青年期」に加え、「若い青年期」（スポックによれば 16、17 歳まで）、「年長の青年期」、「若者（youth）」が現れた。(50)

幼児と子どものための『育児書』に、大学院生までも含めうる「若者」が登場したのは何を意味するのか。若者の問題として多くの場合、青年期の延長が指摘される。つまり大人になれない／ならない者たちは、いつまでも子どものままで大人の行動様式を受け入れないことが強調される。しかし逆に子どもが早くから大人になろうとする側面も見られる。たとえばスポックが言及するように異性とのデートが低年齢化する傾向があり、個人として子どもを成長させる育児は子どもを早熟させようとする側面がある。子ども時代が延びるようにも、逆に大人時代が早まるようにも見ることが可能なのである。

子どもの延長か子どもの浸食か、これは本稿では扱いきれない問題だが、『育児書』の思春期に関する内容改訂は、スポック本人の価値観が混じりながらも、子どもと若者を注視する当時の社会と密接に連動していたことは確かである。(51) ベビーブームに対する期待と戸惑い、いずれの視線もスポックは著書に反映させている。寛容な育児は協調的な人間を育てるとされたが、60 年代の若者の運動は親たちの価値観や社会への根本的な批判であり、暴力的ですらあった。たしかにラディカルを肯定するスポックは当時の世論を代表したと言えないが、その言及自体は著作の内容と社会との連動の証左だといえるだろう。

おわりに

本稿では『スポック博士の育児書』を当時の米国における社会変動と関連させながら考察し、言説としての世代を検討した。スポック博士の「寛容な」育児によって反抗する若者が生まれたとする非難が 1960 年代に保守派を中心として広まり、社会化の新潮流と新たな世代の出現という言説が結びついた。しかし『育児書』は新たな社会の価値観を創ったのではなく、それを反映したに過ぎない。さらにスポック博士を代表とする育児方法はベビーブーマーが持つ多くの特徴の 1 つであり、育児はこの年齢層の全てを特徴づけるものでもない。それでも 1960

(50) Spock, *Baby and Child Care* (1968), 419, 421-422, 426.

(51) エリク・エリクソンが若者の心理的動揺を扱い、アイデンティティやモラトリアムを論じたのも 1950 年代、60 年代である。

年代の断絶性と新しさを強調しやすい世代＝若者論とは異なる見方を、世代＝子ども論は提示している。

これまで本論は 2 つの問題を見てきた。第 1 に、第二次大戦後に社会化の影響力が両親からメディアや仲間集団に移行した現象は、『育児書』が示すように、中産階級の核家族が新たな社会化の主体に脅かされた結果というより、外社会への適応と見ることができる点である。ホワイトカラーの増加とその職業文化の広がりは、社交性や協調性を成功の必要条件とした。家庭の中で絶対の道徳律を埋め込むのではなく、同年輩の仲間集団の中で子どもを成長させることを促した『育児書』は、独立独行の内部指向から組織の中で柔軟に生きる他人指向へという変化と結合していた。

第 2 に、子どもに対する大人の視線が強まり、60 年代までに若者の細分化が進んだことである。ベビーブームは家族像や子ども像を変える一方、その巨大さから社会的に大きな影響を及ぼした。子どもは感情生活の中心となり、かつてないほどの時間と配慮が与えられた。他方、ベビーブーマーは成長するにつれて経済的・教育的に親とは異なる経験をしていき、市場や心理学者たちは若者の分類や概念をより細かく分けていった。

この 2 つは、「子どもが家庭から解放」され「子ども中心」が強まったように見える現象の背後に、大人の指向があった事実を浮かび上がらせる。子ども独自のサブ文化と新しい「世代」を形成したのは、開放的な社交性、同年齢のクラブ、消費など、50 年代の大人による価値観や制度だった。それは 60 年代の「世代」の断絶性よりも継続性を示しているだろう。たしかに若者は大人に強い不信感を抱き、彼らが何に反抗しているのか大人は理解できず、疎通できない溝をお互いが際立たせ、明確な輪郭を持つ世代言説がレリーフのように彫りこまれていった。しかし 60 年代の変化は突如として若者から湧き出たものではなく、50 年代における家族像と子ども像の変化という前提があったのである。『ウォール・ストリート・ジャーナル』紙のいうように、「反抗は失敗ではなく成功の報い」だった。(52)

(52) Jones, *Great Expectations*, 102.